福岡県立大学心理臨床研究，7巻，2015，31-42　　[研究論文]

在日コリアン青年の名のり行動形成に伴う心理的プロセス

権　静香*　・　小嶋秀幹**

在日コリアン青年11人に，本名と通名の使い方についてインタビュー調査を行い，在日コリアン青年の名のり行動を形成するプロセスと，名のり行動と心理的葛藤との関連を明らかにした。名のり行動の形成には，<経験>，<イメージ>，<環境・制度の影響>，<重要他者の意識>，<意識>，<名のりに伴う感情> が関連していた。また，名のり行動において葛藤を示す人と，葛藤を示さずに現在の名のり行動を形成している人がいることが明らかとなった。本名を名のることでポジティブな経験をし，それによって本名に対するポジティブな感情を持ちながらも，本名を名乗ることによるネガティブな経験やネガティブな感情が同時に存在する場合，また，重要他者の意識が通名使用を促すものであり，かつ自分自身の経験や感情が本名に対してポジティブなものである場合，葛藤が生じるというプロセスが見出された。

Ⅰ．問題と目的

法務省の登録外国人統計によれば，2011年時点で日本には約55万人の在日コリアンが生活している。そして，在日コリアンのほとんどが出身文化の名前である本名と，日本語の名前である通名を持っている。本名と通名，2つの名前を持っていることは在日コリアンが出身文化と日本の2つの文化的背景を持っていることの象徴とも言える。在日コリアンの中には本名と通名のうちどちらか一方のみを使用して生活する人もいれば，両方を状況に応じて使い分けながら生活する人もいる。これは日本で生活する上での利便性や，差別などを避けるためといった理由が考えられ，個人の名前の使い方にはそこに至るまでの，その人自身の経験や考え方などによるプロセスがある。在日コリアンは日本学校などに通名で通っていても，卒業証書などの正式な文書には本名が記載される。また，パスポートも本名が記載され，16歳になると外国人登録証を発行し携帯する義務がある。

神奈川県内在住の韓国・朝鮮人，中国人に対する実態調査によると，神奈川県内在住の人の中で通名を持っている在日朝鮮人は91.3%，そのうち本名のみで生活している人は3.5%，本名と通名を使い分けている人は58.9%，通名のみで生活している人は37.0%となっている（金原・石田・小沢・梶村・田中・三橋，1986）。「通名」で生活している場合には，特に自分から打ち明けなければ，接する相手には在日コリアンとはわからない。在日コリアンの多くは様々な対人場面において本名と通名を使い分けながら社会に適応している。特に進学や就職，結婚と自身のアイデンティティについて考える機会が多い在日コリアン青年層では，状況によって民族的な意識が変容しやすく，そうした変容は個人の名前の使い方にも影響すると考えられる。

在日韓国・朝鮮人の本名使用を促す一方策についての研究で宣（2001）は，在日韓国・朝鮮人の「通名使用」は，社会生活上の緊張や摩擦を避けるためのストラテジーとも言えるが，アイデンティティ喪失の危険性を強く持つものといわざるを得ず，特にこの危険性は在日2・3・4世にとって大きいと述べている。李・田渕（2005）による在日外国人の保護者の会についての調査によると，2・3世世代の親が子どもに通名を付ける理由として，民族差別と偏見から子どもを守ることが

*鳥栖市立障害児通園施設ひかり園
**福岡県立大学大学院　人間社会学研究科　心理臨床専攻　教授

挙げられている。

平・川本・慎・中村(1995)の朝鮮聡聯系の朝鮮学校経験者の在日朝鮮人の大学生を対象に行なわれた調査では，朝鮮語の名前（本名）と日本語の名前（通名）の使い分けにおいては，本名よりも通名の使用に対する抵抗感が全体的に高かった。児童期には単に自分と周りを区別するという機能として使用されてきた「名前」が，青年期では自己の象徴であり，個人のアイデンティティそのものとして用いられるようになる。アイデンティティが形成される時期を朝鮮学校という環境で，本名で過ごしたこの調査の対象者達は，自然と自己の象徴やアイデンティティが，通名よりも本名を軸として形成されていると考えられる。

状況によって本名と通名を使い分けることで社会に適応しようとするならば，時には本名を名乗ることへの躊躇いや社会的な制約から個人の意志に反して通名を名乗ることもあるかもしれない。そこには本来の自分の意思とは異なる名乗り行動によって心理的な葛藤が生じる可能性が考えられる。また，それぞれの個人が経験する多様な対人場面の中でも，在日コリアンに共通する名のり行動のパターンが存在すると考えられる。

筆頭著者自身も在日コリアン３世であり，これまでの日常生活で本名だけを名乗って生活していくことの不便さや，名のり行動において，葛藤を感じることがあった。自分自身の経験をもとに青年層の在日コリアンは，進学や就職などの際に，日本社会や日本人と接する機会が多いため，自身の出身文化と日本の文化の間でのせめぎ合いの中で葛藤が生じやすいのではないかと考えたことが本研究の動機である。本研究では個人の感情や経験などに焦点を当てて細かく聞き取り調査を行い，どのような経験や感情から現在のその人の名のり行動が形成されたのか，そのプロセスと名のり行動における葛藤に注目し，その有無について検討した。

在日外国人の民族的なアイデンティティを理解するに当たって，本人の名前の使い方に注目することが有効であることはこれまで何度か指摘されており（平ら，1995；竹尾・矢吹ら，2006；矢吹，2005），竹尾ら(2006)の研究では本人の名前の使い方を「名のり」としている。本研究でも本人の名前（本名と通名）の使い方を「名のり」とし，在日コリアン青年層を対象として状況による本名と通名の使い分けについて調査を行った。なお，本論文では，朝鮮籍を持つ在日朝鮮人と韓国籍を持つ在日韓国人を総称して在日コリアンと呼ぶ。

Ⅱ．対象と方法

1．調査対象者

20～24歳の在日コリアン青年11名で，調査者の友人・知人，またその紹介で，本研究の趣旨に同意が得られたものを対象とした。各対象者のプロフィールを表１に示した。本研究では，「個人の民族的アイデンティティの変容やシフトが起こりやすい層」(平ら，1995)

表１　調査対象者の属性

NO.	年齢	性別	国籍	名のり形態*	経歴
1	23	女	朝鮮	使い分け	小・中・高：朝鮮学校　大学：日本学校
2	23	男	韓国	本名	小・中・高・大：日本学校　韓国留学
3	20	女	朝鮮	使い分け	小・中・高：朝鮮学校　大学：日本学校
4	23	女	韓国	日本名	小・中・高・大：日本学校　韓国留学　日本企業に就職
5	24	男	朝鮮	本名	小：日本学校　中・高・大：朝鮮学校　在日機関に就職
6	23	女	韓国	本名	小：日本学校　中・高・大：朝鮮学校　在日機関に就職
7	23	男	韓国	本名	小４まで朝鮮学校　以降日本学校
8	22	女	韓国	使い分け	小・中・高：朝鮮学校　大学：日本学校
9	20	女	韓国	本名	小・中・高：朝鮮学校　専門学校
10	20	女	韓国	本名	小・中：朝鮮学校　高校・大学：日本学校
11	24	女	朝鮮	使い分け	小・中・高：朝鮮学校　大学：日本学校　日本企業に就職

＊名のり形態は，以下の３つに分類した。
本名＝主に本名を名のっている，使い分け＝本名と通名を使い分けている，日本名＝主に日本名を名のっている

である青年層の在日コリアンの名前の使い分けを行う状況やそこで生じる感情，特に名のり行動によって生じる心理的葛藤の有無を明らかにするため，青年期の中でも，進学や就職など環境の変化が生じやすく，日常生活の中で日本人・日本社会と接する機会が圧倒的に多いと考えられる19～25歳の在日コリアンを対象とした。調査にあたっては対象者に，プライバシーの保護，データの取り扱いなどについて十分説明を行い，文書で同意を得て実施した。

2. データ収集方法

リサーチクエスチョンは，「在日コリアン青年に共通する名のり行動のパターンを形成するプロセスについて明らかにすること」とした。

一人当たり60分程度で半構造化面接を行った。主な質問項目は，「名前を使い分けたエピソード」，「なぜ名前を使い分けるのか」，「名前を名乗る（名乗った）ときの感情」，「本名と通名どちらをメインで生活しているか，また今後生活していくのか」，「国籍に対する考え」，「名前や国籍に対する家族の考え」についてである。これらについて対象者に自由に語ってもらい，その流れの中で必要に応じて質問をしてさらに詳しく語ってもらった。

本研究では，調査者と対象者とでこれまでの生活環境や文化的背景が異なり，調査対象者の視点に立った名前の使い分けの状況や心理の理解のためには，対象者の語りによって展開された主観的世界にできる限り入り込み理解することが重要であるため，インタビュー調査内容を質的に分析することが適切と考えた。インタビュー調査は2011年4月から11月にかけて実施した。インタビューにかかった時間は最長で78分，最短で31分，平均で48分であった。

3. データ分析方法

データの分析には，木下（2003，2007）による修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（modified grounded theory approach，以下M-GTA）を採用した。分析では，インタビューデータを逐語化し，分析テーマと関連する箇所に注目して分析ワークシートを作成しながら概念の生成を行った。ワークシートには，概念名，定義，具体例（ヴァリエーション），理論的メモを記入し，同時並行的にそれぞれの対象者のデータから具体例を探して追加していった。生成された概念は概念同士で比較を繰り返し，関連のある概念同士が集め，カテゴリーを作成した。さらに，カテゴリー同士の関連について検討し，全体の関係とプロセスを表す結果図を作成した。

Ⅲ．結果

1. 名のりの形態

本研究の対象者の名のり行動には，「主に本名を名のる」，「本名と通名を使い分ける」，「主に日本名を名のる」という3種類があった。本名と通名のどちらに重点を置いているかによって「主に本名を名のる」と「主に日本名を名のる」に分けられ，「本名と通名を使い分ける」にはどちらも同じくらいの割合で名乗っている人が含まれた。対象者11名のうち，「主に本名を名のる」は6名，「本名と通名を使い分ける」は4名，「主に通名を名のる」は1名であった。しかし，「主に本名を名のる」と語った6名の対象者のうち，日本名を全く使用していないのは1名のみで，残りの5名は店の予約など何らかの場面で通名を使用していた。

2. 生成されたストーリーライン

M-GTAを用いて分析したところ，30の概念と8つのカテゴリーが生成された。各概念の定義と具体例を表2に，概念とカテゴリーの関係を図1に示した。なお，概念は【　】，カテゴリーは＜　＞で表記した。名のり行動を形成するプロセスにて，11名の対象者のうち9名には葛藤がみられた。ポジティブな感情とネガティブな感情との間で葛藤を示した対象者の例としてNo.8の名のり行動のプロセスを図2に，重要他者の意識と自分の意識の間で葛藤を示した例としてNo.10のプロセスを図3に，葛藤を示さなかった例としてNo.9のプロセスを図4に示す。なお，2名はプロセスの中に葛藤が明確にみられなかった。生成されたストーリーラインを以下に示す。

在日コリアンの名のり行動は，実際の名のりの＜経験＞や母国に対する＜イメージ＞が個人の＜名のりに伴う感情＞や名前に関する＜意識＞に影響を及ぼし，その＜名のりに伴う感情＞や＜意識＞から名のり＜行動＞が形成される。＜経験＞には名のりに関するポジティブな経験とネガティブな経験があり，ポジティブな経験は＜名のりに伴う感情＞におけるポジティブな感情に関連し，ネガティブな経験はネガティブな感情と関連している。個人のなかでポジティブな経験とネガティブな経験の両方が存在し，それによって，名のりに伴うポジティブな感情とネガティブな感情の両方が生じている場合，＜名のり行動における葛藤＞が生じる。本名を名のることによるネガティブな

経験から本名に対するネガティブな感情が生じると，本名に対するポジティブな感情とせめぎ合いが生じ，葛藤が生じる。また，<重要他者の意識>が通名使用を促すものであり，本人は本名を使用する意向がある場合に両者がぶつかり合うことでも葛藤が生じる。

そのプロセスは<名のりに伴う感情>から<行動>へと影響を及ぼすものもあれば，<意識>から<行動>に影響するものもある。また，個人の名前に関する<意識>には学校・教育や身分証明書などの<環境・制度の影響>や<重要他者の意識>が関連しており，<重要他者の意識>は個人の<イメージ>の形成にも影響している。

表2　概念とその定義、具体例

カテゴリー1　<経　験>	
概念名	定義と具体例
【本名を名乗って良かったと感じた経験】	定義：本名を名乗ることによって目立ったり興味を持ってもらえるなどのポジティブな経験のこと。 具体例：実際、先生もとても興味を持ってくれて、教頭先生と仲良くなったんですよ。名前が韓国人だから。名乗ったことないのに向こうが名前知っていて、そういうのも結構あって、興味を持ってもらえる。
【本名を名乗りづらいと感じた経験】	定義：噂話や周囲の反応、本名を名乗ることで何らかの問題が生じたことによって、本名を名乗りづらくなってしまうといったネガティブな経験のこと。 具体例：なんか変なとこで目立つんですよ。名前が。大講義室で名前呼び間違えられたりとか、留学生と間違われて前に呼ばれたりっていうのがあったので、だから（日本名で大学に通っていれば）もうちょっと埋もれて、埋もれてっていうか、みんなとおんなじ大勢の中に入って目立たずに過ごせたんじゃないかと思う。
カテゴリー2　<イメージ>	
【本名を名乗りづらくする母国のイメージについての自分のイメージ】	定義：日本人が母国に対して悪いイメージを持っているだろうという自分の意識が、本名を名乗りづらくしていること。 具体例：休み時間とかもコソコソ「また核作ってさ」みたいな「核がなんとかでさ」みたいな話をちょっと小耳に挟む。たまにそういう話をする人がいる。「朝鮮また核作ったらしいよ」とかそういう…（中略）そんな話を聞くと、ちょっとこの人達には自己紹介したくないなって思う。きっとこの人達は朝鮮にいいイメージを持ってないだろうなみたいな。
【就職活動における自己開示とそれに伴う自分のイメージ】	定義：就職活動をする上で本名や在日であるということを開示することと、そうした自己開示をすることに対する個人が持つイメージ。 具体例：やっぱり就活の時はどうしても日本名で行こうっていうのはありましたね。やっぱりそこで変な判断をされたくはなかったし、逆に韓国名で行ってもよかったんだけど、なんかやっぱりそこでちょっとあんまり深く突っ込まれたくなかったので、もう言わなくて済む所では日本名で通せた方がいいのかなって…。
カテゴリー3　<意　識>	
【国籍についての考え】	定義：国籍に対して自分自身が持っている考えのこと。 具体例：やっぱり就職とかを考えても、朝鮮籍だとやっぱり全然上手くいかないですよね。今の日本だと。まぁ朝鮮籍に変な誇りは親とかおじいちゃんとかはあったと思うんですけど、でもなんかそれにこだわっていたら日本じゃ生きていけないから、もう北に帰ることはないだろうし、でも日本に帰化してしまうよりは韓国籍に変えようかなみたいな。
【命名における工夫】	定義：本名を意識しながらも日本で生活しやすいように、子どもの名前を工夫すること。 具体例：親が名前を付ける時に下の名前だけなんですけど、日本名でも韓国名でも読み方が同じ名前にしようとは決めていたみたいで、だからあんまり不便はなかったです。
【本名の自分と日本名の自分】	定義：本名を名乗っている時の自分と日本名を名乗っている時の自分が個人の中でも違うこと。 具体例：「□□（日本名）の自分は普通の日本の女の子と同じような…日本人っぽい自分なんだ。■■（本名）はなんかみんなの中でもちょっとなんか違う自分…みんなとは違う気がする…気持ち違う女の子だね。
【日本社会への適応】	定義：在日として生きて行くという気持ちを持ちながらも日本で生活することを前提としてある程度適応していくという考え。 具体例：もし（就職する時に）名前本名じゃなくて日本名だったら採用してあげるって言われたら、その時の状況にもよるかもしれないけど、「あ、じゃぁ」って言うかも知れないですね。究極だけどそうなったら…「じゃぁ□□（日本名）でいいです」って言うかもしれないです。自分の中で、在日で確固たるものがあるとしても、どこかでやっぱり日本で生きていくっていうのが…在日っていうのも前提やし、日本で生きて行くっていうのも前提なら多少そこに合わせるのも必要かなっていうもちょっとある。合わせる所は合わせないと生きていけないのかなとも思うし、かと言って名前を「□□です」って名乗った所で日本人になるわけじゃないし。

【今後の名前の使い方】	定義：今後の名のり行動についての考えや希望のこと。 具体例：就職もバイトと一緒で周りの人が全部日本の人で、来る人も全然違ったりするでしょ？だからちょっと迷ったけど、学校とかここまで本名できたからそのまま行ってしまえみたいな所はあります。ちょっと勢いみたいな部分も。でもどうなんだろう、分かりやすい方がいいのかな…。若干思いやりの精神みたいなのがあるんですよ、自分の中で。分かりやすい方がいいかな。
【在日籍という枠組みの曖昧さ】	定義：国籍という枠組みに曖昧さを感じること 具体例：日本でも韓国でも在日っていう存在は中途半端。日本人でもないし、かと言って韓国に行っても外国人。
カテゴリー4　＜環境・制度の影響＞	
概念名	定義と具体例
【学校・教育の影響】	定義：学校での教育が個人の民族意識に与える影響のこと。 具体例：やっぱいくつか流れに沿うところはあってももう一つ自分の中の「在日です」っていうのはちゃんと持ってないとどんどん流れていってしまうのかなと。（「在日です」っていう考え方とか価値観は）朝鮮学校に行ってなかったら絶対思ってないです。
【身分証明書の影響】	定義：パスポートや外国人登録証（語りの中では"外登"と略されている）などの身分証明書が個人の名前に対する意識に影響を与えていること。 具体例：□□（日本名）で登録して、「証明書とかありますか」って言われて、実は通称名なんでみたいな感じで外登を出す、なんか外登を出して、なんでこの人通称名使うんだろうって思われているんじゃないかって思って、本名で生活すればいいのにと相手が思っているんじゃないかと思って、なんか嫌になるよね。何この人みたいな。なんでそんなわざわざ本名があるのに通称名を使うんだみたいな。
カテゴリー5　＜重要他者の意識＞	
概念名	定義と具体例
【名前の使い分けについての親（家族）の考え】	定義：本名と通名を使い分けることについて親（家族）はどう考えているかということ。 具体例：高校入るときも一回喧嘩になったんですよ。「絶対本名で行く！」って言ったらお母さんが「日本名でいきなさいよ！」みたいな。喧嘩になって、でも結局押し通して本名で行きました。多分差別とかのいじめを心配して。お母さんは日本名で生きてるから、日本名使わないと仕事もできないとか、周りに変に思われるとかで、そういう経験があるから多分日本名で行きなさいって。
【国籍に対する家族・親族の意識】	定義：家族や親族の国籍に対する意識や民族意識のこと。 具体例：朝鮮籍に変な誇りは親とかおじいちゃんとかはあったと思う。
【家族の民族意識】	定義：家族、親族の民族や出身文化に対する考えのことである。 具体例：お父さんが日本学校出身なんですよ。で、朝鮮語とか全然習ってないのに、独学で朝鮮語喋れるようになって、歴史も私より知っているんですよ。
カテゴリー6　＜名のりに伴う感情＞	
【本名を名乗ることで生じるポジティブな感情】	定義：本名を名乗ることで名前を褒められたり、興味を持ってもらうことができうれしいなどのポジティブな感情が生じること。 具体例：（友人に）アドレス送ったらさ、（携帯の自分の名前）ひらがなで書いてあるんだけど、（中略）「え、いいね！▲▲（本名）って可愛いね！」って言われて、嬉しいよね。」
【本名に対する愛着（親しみ）】	定義：家族や友人などから呼ばれ慣れた本名の方が親しみを感じること。 具体例：本名のほうがやっぱりずっと慣れた名前なので、呼ばれ慣れているのは本名の方ですね。日本名で呼ばれるとちょっと距離がある感じがします。
【日本名を名乗ることで生じるポジティブな感情】	定義：日本名を名乗ることで大勢の人の中でも目立たず安心を感じるというようなポジティブな感情を生じること。 具体例：日本名の方がやっぱり日本に人口も多いし大勢の中の一人って感じがするんですけど、本名だとなんか個人が特定されるような気がした。
【繰り返し名前を聞き返されたり言い間違えられることで生じる感情】	定義：名前が覚えづらく、一度で聞き取りづらいため、大きな声ではっきりと言わなくてはならず、何度も聞き返されたり、言い間違えられることで何らかの感情を生じること。 具体例：読み方が朝鮮読みでも、呼ばれやすい読み方やったらいいんやけど、▲▲（本名）って説明しようとしたら、必ず2、3回もう1回って言われる。そういうのがわずらわしい

【本名を名乗ることで生じるネガティブな感情】	定義：本名を名乗ることで自分のことを色々と聞かれたり説明しなくてはならずネガティブな感情を生じること。 具体例：在日について色々聞かれるやん？「在日って何？」とか「学校どこ行ったと？」とか言われると、別に何も自分悪いことしてないけど…最初に朝鮮学校って名乗るのも嫌やし。朝鮮学校って言った所で通じる人と通じん人がおるやん？朝鮮学校って何？みたいの言われて、「私みたいな在日朝鮮人が行くところ」って言って、そしたら「じゃあ朝鮮語しゃべれると？しゃべって」って言われるそのくだりが一番嫌。（中略）なんか悲しくなるよね。」
【在日と知られたくない理由】	定義：在日であることを周囲に打ち明けにくい、知られたくないと感じる理由のこと。 具体例：あんまり人と違うものっていうか、人と同じが良かったっていうかさ、人と違うものを持ってることに抵抗があった。根底が違うわけじゃん？なんか。（知られたくないなっていう気持ちは）あった、あった。正直言うとね。
【日本名を名乗ることで生じるネガティブな感情】	定義：日本名を名乗ることで戸惑いや違和感など何らかのネガティブな感情を生じることである。 具体例：「大学とかも全部本名で来ている、それをいきなり全部□□で生活するのは、自分自身も心で戸惑いがあるんじゃないかなって思うし。だから今まで持っとった本名を全部捨てて…てことは本名で生活してきた過去とかも薄れていってしまうんじゃないかと思うから、それならやっぱり□□で全てを通すよりも本名を使った方がいいんじゃないかと。今まで生活してきたものも変わらないでしょ?」
【名前の使い分けで生じる不便さ（不都合）】	定義：名前を使い分けることによって不都合や不便な状況が生じることである。 具体例：なんか何かを契約する時とかに日本名と韓国名の使い分けはめんどくさいんだと思います。どれを日本名で契約したのかとかどの名前を使ってたのかとかいつもこんがらがってて。
カテゴリー７　＜名のり行動における葛藤＞	
【名のり行動における葛藤】	定義：名のり行動において何らかの相反する感情が生じ葛藤が生じること。 具体例：日本名を学校の外とかで名乗るときに、12年も朝鮮学校に行って、そんな民族教育を受けてきたのに、ちょっと堂々と自分の本名を名乗れないことにも嫌だなっていう気持ちはあります。本名言うのも嫌だけど、嫌っていうかその、言うのはちょっとためらいがあるんですけど、言わないのもなんかこれでいいのかなって思うときもあります。
カテゴリー８　＜行　動＞	
【経験による価値観の変化とそれに伴う名前の使い分け】	定義：何らかの経験を通して本名と日本名を使い分けることにおいて価値観の変化が生じることである。 具体例：高校入った時に世間は広いって思って。なんか、気にすることないなって、本名について。それで大学入ってさらに広がって、留学生とかいっぱいいるし、その中で日本名わざわざ使う必要ないなって。本名で別に支障なく生きていけるみたいな。
【名乗る相手との親密度による使い分け】	定義：相手との親密度によって本名と通名を使い分けることである。 具体例：（自分のことを）打ち明けた人はいるけどね、一人だけ。なにけに打ち明けた。仲良い友達だったんだよね、高校大学一緒で。高校３年間クラス一緒で。なんでだろうね。まぁ、打ち明けとくべきかなと。
【環境が変わる時の本名と通名の選択】	定義：環境が変わる時に新しい環境に本名でいくのか通名でいくのかを選択することである。 具体例：小さい頃から自分には名前２つあるみたいなことは知っていて、でも日本学校だからずっと日本名で行ってたけど、進学する時とかにいつも、じゃぁ中学にあがるけど日本名で行く？韓国名で行く？みたいな決断は毎回してたんですけど、でも大体結局は日本名で行こうみたいな話になって。
【一時的な環境（状況）による使い分け】	定義：アルバイトや店の予約など、一時的な環境（状況）による名前の使い分けのこと。 具体例：（塾は）なんとなく本名よりも日本名の方が行きやすい気がしたので、日本名にしていきました。たぶんそれから高校3年のときアルバイトをするときも日本名でアルバイトしたし。
【名乗る相手による名前の使い分け】	定義：朝鮮・韓国人には本名、日本人には日本名など、名乗る相手によって本名と通名を使い分けること。 具体例：（大学で在日であることを公表したのは？）行った学部が東アジア学科みたいなので、なんか志望理由はって聞かれた時にもう結構抵抗なく言ってましたね。学科的にも韓国とかに対して理解がある人達だろうなと思っていたから。
【本名を名乗ることによる周囲の意識変化】	定義：自分が本名を名乗ることで周囲の人の意識、考え方を変えたいという気持ちのことである。 具体例：やっぱり朝鮮学校って差別とかまだあるじゃないですか。それって日本の人がメディアを見て全体像を見てる、北朝鮮とか。だから、差別とかあると思って。でも、１対１だったらそういう偏見とかも無くなると思って、１対１の付き合いをしたいと思って。その面で本名を使うのは効果的やなって思う。

在日コリアン青年の名のり行動形成に伴う心理的プロセス

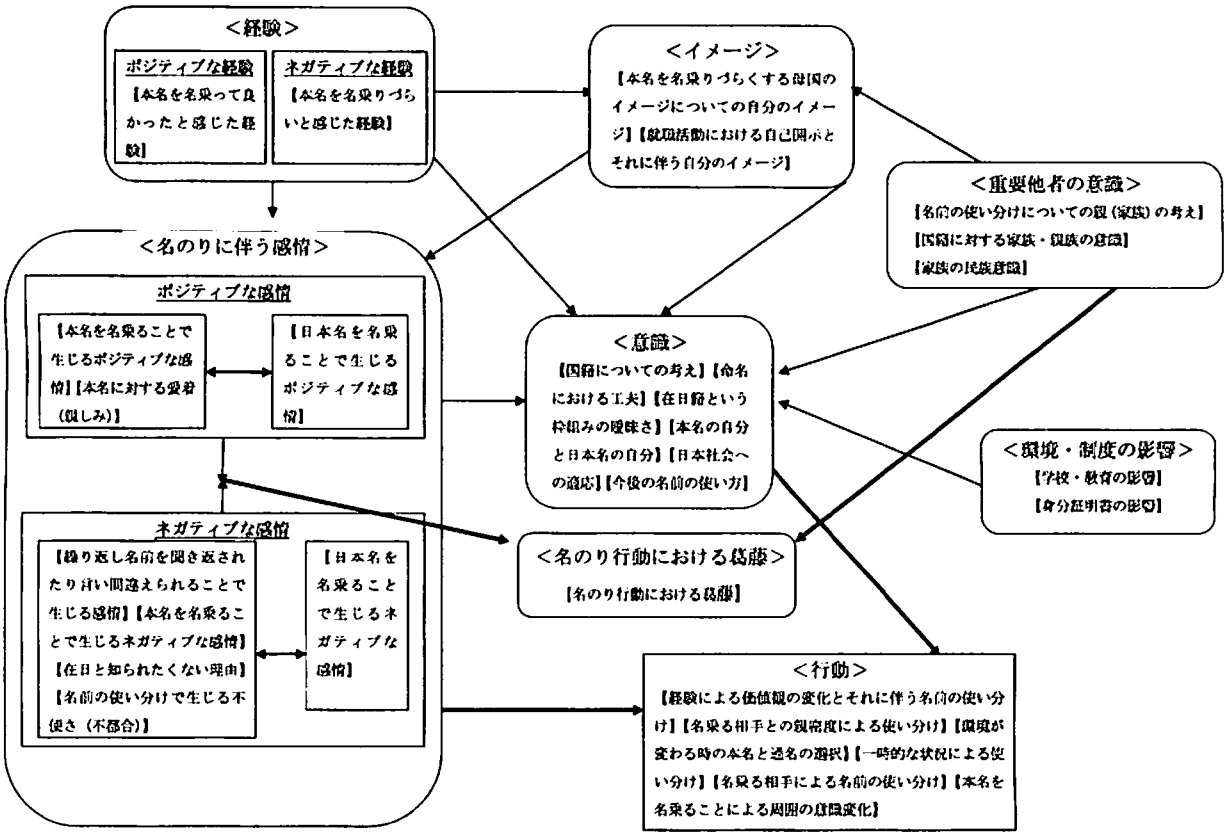

図1　在日コリアン青年の名のり行動形成に伴う心理的プロセス

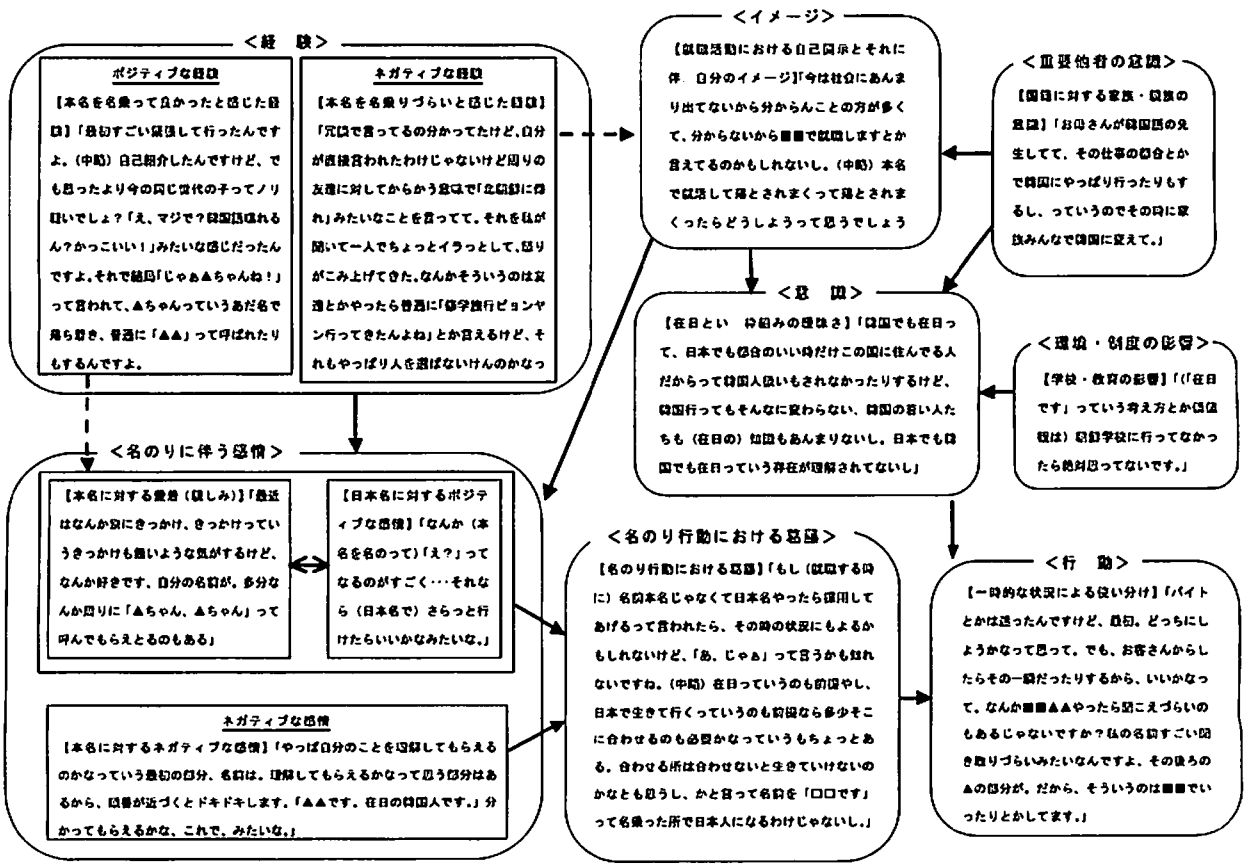

図2　ポジティブな感情とネガティブな感情との間で葛藤を示した例(No.8)

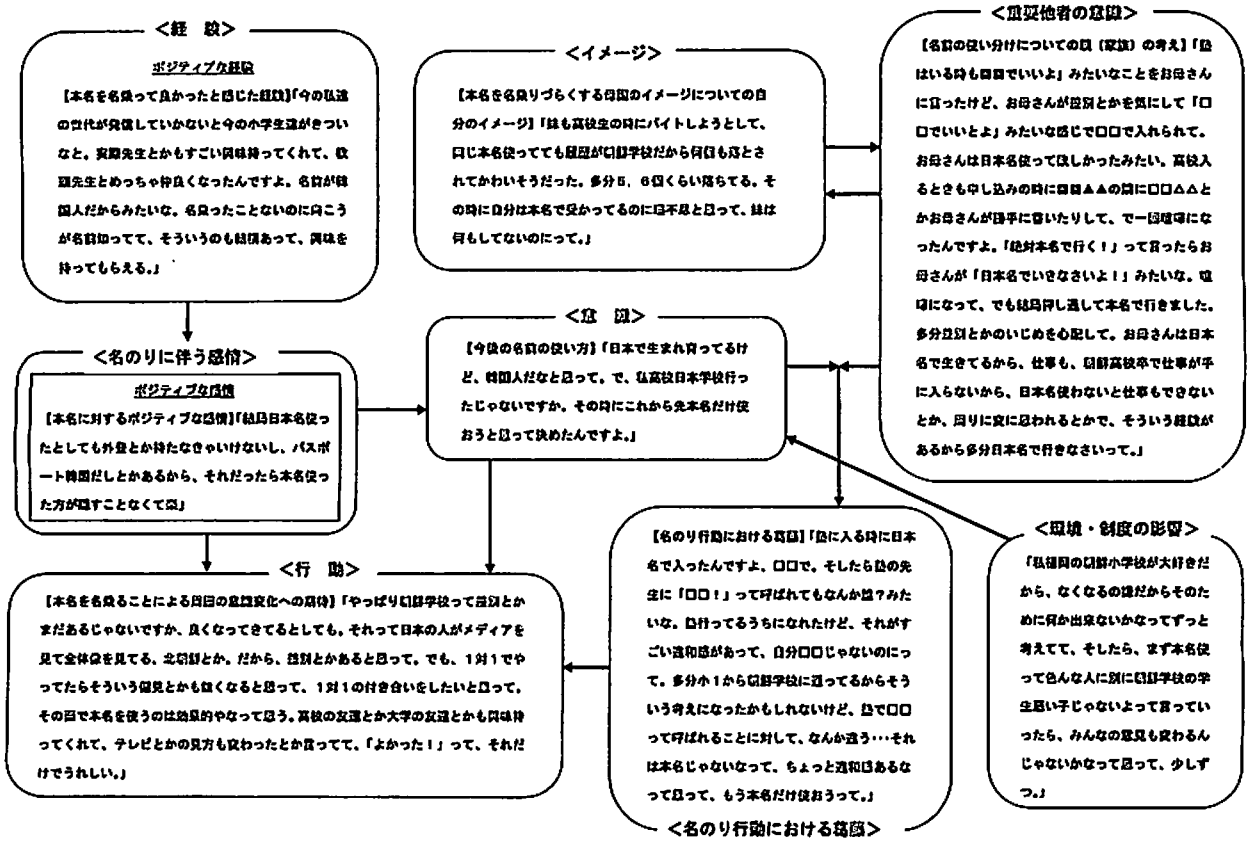

図3　重要他者の意識と自分の意識との間で葛藤を示した例(No.10)

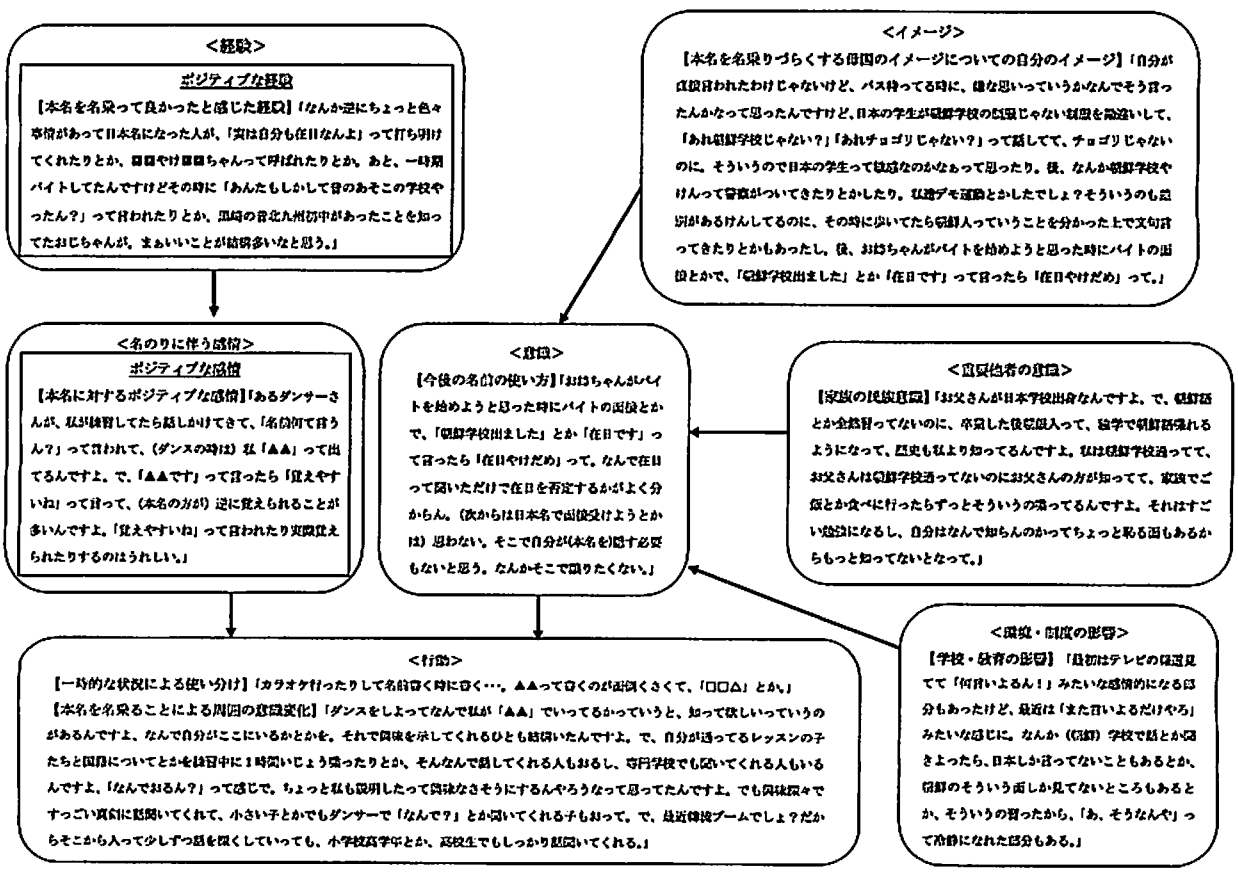

図4　名のり行動において葛藤を示さなかった例(No.9)

Ⅳ．考察

ここでは在日コリアン青年の名のり行動形成のプロセスと名のりの形態について，また名のり行動において葛藤を示した例，葛藤を示さなかった例について考察する。

1．名のりの形態について

名のりの形態は，「主に本名を名のる」は6名，「本名と通名を使い分ける」は4名，「主に通名を名のる」は1名であった。民族教育を受けた経験がある対象者が必ずしも本名を名のっているといった傾向はみられなかったが，一方で対象者の中でも民族教育経験者は「主に本名を名のる」か「本名と通名を使い分ける」のどちらかであり，本名を名のる頻度が多い傾向があった。宣（2001）は，在日コリアンが自然に本名を名乗るためには，韓国語で名前を呼ばれ，また自らも韓国語で名のる経験が不可欠であると述べている。民族学校経験者は本名を呼ばれ，自らも本名を名乗る機会が多く，本名を名のることが自然な環境を経験しているため，本名を名のる頻度が多い可能性が考えられた。しかし，「主に本名を名のる」と語った6名の対象者のうち，日本名を全く使用していないのは1名のみで，残りの5名は店の予約やポイントカードの発行，アンケートの回答など何らかの場面で通名を使用していた。これは，中村（2001）のいう「状況対応性」と共通すると考えられる。意識して本名を使っているが，状況別に細かく見ていくと通名を使っている場面が存在しており，名のり行動を本名に一貫することの難しさがあると言える。在日コリアン青年は，自身の経験などを通して名のりに関して悩み，葛藤しながら自分なりの何かしらの結論を出すが，その結論を通すことが困難な社会的背景があるのではないか。そうした困難にぶつかった時に，「本名を名のる」という自分なりの結論が揺らぎ，通名を名のるという点に，平ら（1995）の言う「個人の民族的アイデンティティの変容やシフトが起こりやすい層」としての青年層の在日コリアンの特徴が表れていると考えられた。

2．在日コリアン青年の名のり行動形成のプロセスについて

在日コリアンの名のり行動は，実際の名のりの＜経験＞や母国に対する＜イメージ＞が個人の＜名のりに伴う感情＞や名前に関する＜意識＞に影響を及ぼし，その＜名のりに伴う感情＞や＜意識＞から名のり＜行動＞が形成されると考えられた。＜経験＞には名のりに関するポジティブな経験とネガティブな経験があり，ポジティブな経験は＜名のりに伴う感情＞におけるポジティブな感情に関連し，ネガティブな経験はネガティブな感情と関連していると思われた。本名を名のり，周囲にも受け入れられる＜経験＞が本名へのポジティブな感情に関連すると考えられた。また，個人のなかでポジティブな経験とネガティブな経験の両方が存在し，それによって，名のりに伴うポジティブな感情とネガティブな感情の両方が生じている場合，【名のり行動における葛藤】が生じる可能性が考えられた。本名を名のることによってポジティブな経験のみを経ている場合，本名に対してネガティブな感情を生じることがなく，名のり行動においても自然と本名を使うことができるためであり，反対に本名を名のることによるネガティブな経験から本名に対するネガティブな感情が生じると，本名に対するポジティブな感情とせめぎ合いが生じ，葛藤が生じる。また，重要他者の意識が通名使用を促すものであり，本人は本名を使用する意向がある場合に両者がぶつかり合うことでも葛藤が生じると考えられた。

感情や意識から＜行動＞を形成するまでのプロセスは＜意識＞から＜行動＞に影響するものもあれば，＜名のりに伴う感情＞から＜行動＞へと影響を及ぼすものもある。＜意識＞から＜行動＞への流れは，＜イメージ＞や＜重要他者の意識＞，学校・教育などの＜環境・制度の影響＞に順応し，そうした周囲や環境の影響等によって，形成された個人の＜意識＞から名のり行動が形成されるプロセスである。重松（2009）や原（2011）の研究でも，在日外国人のアイデンティティの構築には環境の要因が大きく関わっていると述べられており，個人のアイデンティティを反映する名のりにも環境の要因が関連していることが示唆された。一方，感情から行動への流れは，周囲の影響だけでなく，自身の＜経験＞を通して名のりに関する様々な感情を持ち，それらが名のり行動の形成に影響しているプロセスであり，様々な＜経験＞をすることで生じるプロセスであると考えられた。これは，ある程度の＜経験＞を持ち，なんらかの感情が生じることで自分自身のアイデンティティについて考え直すことにつながる，青年期に特徴的な名のり行動形成のプロセスである。また，個人の名前に関する＜意識＞には学校・教育や身分証明書などの＜環境・制度の影響＞や＜重要他者の意識＞が関連しており，＜重要他者の意識＞は個人の＜イメージ＞の形成にも影響していると考えられた。竹尾ら（2006）の研究でも名

のりの関連要因として家族などの重要他者の存在があることが語られている。名のり行動には重要他者の態度や要求が関与しており，本研究では重要他者の意識をそのまま受け入れ，自身の名のり行動に適応している例もあれば，親世代から名のりについて聞く話と，実際の個人の体験を照らし合わせて世代による違いを感じたり，重要他者の意識を修正したりしながら，それとは反対の名のり行動をとる例もあった。また，<イメージ>のカテゴリーでは，主に本名を名乗りづらくする出身文化のイメージについて，就職活動において本名を名のることに対するイメージについて語られたがポジティブなイメージは少なく，特に出身文化のイメージについてはネガティブなものだけであった。李・田渕（2005）は在日コリアンが本名を名乗るには周囲の許容的な雰囲気が求められるとしており，自分の出身文化に対して良くないイメージを持たれているのではないかという個人のイメージによって，許容的な雰囲気を感じられず，本名を名乗りづらくしていると考えられた。

3. 名のり行動における葛藤について

分析の結果，名のり行動において葛藤が存在していた。名のり行動における葛藤は，本名を名のることによるポジティブな経験をし，それによって本名に対するポジティブな感情を持ちながらも，本名を名乗ることによるネガティブな経験やネガティブな感情が一人の個人の中に同時に存在する場合，また，重要他者の意識が通名使用を促すようなものであり，かつ自分自身の経験や感情が本名に対してポジティブなものである場合，それらが互いにぶつかることで葛藤が生じるというプロセスが見出された。しかし11名の対象者のうち葛藤を示さない者もいた。ポジティブな感情とネガティブな感情との間で葛藤を示した対象者は11名中7名，重要他者の意識と自分の意識との間で葛藤を示した対象者は2名，葛藤を示さなかった対象者は2名であった。ポジティブな感情とネガティブな感情との間で葛藤を示した対象者の例としてNo.8の名のり行動のプロセスを，重要他者の意識と自分の意識の間で葛藤を示した例としてNo.10のプロセスを，葛藤を示さなかった例としてNo.9のプロセスを以下で考察する。

(1) ポジティブな感情とネガティブな感情との間で葛藤を示した例

No.8の名のり行動のプロセスを図2に示した。No.8は本名を名のって周囲に受け入れられたというポジティブな経験と，自分の出身文化があまり良くない意味合いで話題にされているのを聞くというネガティブな経験の両者を持っていた。本名で受け入れられたポジティブな経験は，<名のり行動に伴う感情>における【本名に対する愛着（親しみ）】へとつながっていた。しかし，反対に本名を名のって自分を理解してもらえるのか，受け入れてもらえるだろうかといった【本名に対するネガティブな感情】が生じ，それならば日本名を名のった方が分かりやすいといった【日本名に対するポジティブな感情】も抱いていた。このように【本名に対する愛着（親しみ）】を持ちながらも【本名に対するネガティブな感情】を抱くことで，「自分の中で在日で確固たるものがあるとしても，日本で生きていくっていうのも前提なら…合わせる所は合わせないと生きていけないのかなとも思う」と語っているように，在日として生きて行くという前提と日本で生きて行くという前提との間で【葛藤】が生じていた。

周囲で自分の出身文化があまり良くない意味合いで話題にされているのを聞くというネガティブな経験は，出身文化に良くないイメージがあるのではないかという考えや，そうしたイメージから就職活動などにも支障が出るのではないかといった個人の <イメージ> に影響している可能性がある。また，このような <イメージ> から自分が理解してもらえるだろうかといった本名に対するネガティブな感情が生じたり，日本で生活していても自分が日本人ではなく，また韓国人や朝鮮人でもない「在日」という曖昧で不安定な存在であるといった <意識> を形成することに少なからず影響を与えていた。この，「在日」としての立場については，朝鮮学校に通うことで「自分は在日である」という考え方が身に付いたと語っており，個人の <意識> への教育環境の影響が示唆される。

No.8は国籍を母親の仕事の都合で朝鮮籍から韓国籍に変更している。他の対象者でも「日本籍じゃなかったら国籍を朝鮮籍から韓国籍に変更することは特に問題ない」という発言も何名かから共通して出ており，彼らは朝鮮人や韓国人ではなく「在日」という枠組みを持っているのではないかと考えられた。

No.8の場合，このようにして個人の中で国籍とは別の「在日」としての意識を持ち，名のりをめぐる葛藤も抱えながら，学校では本名，アルバイトは通名のように名前を使い分けるという行動を形成していた。

(2) 重要他者の意識と自分の意識との間で葛藤を示した例

No.10の名のり行動のプロセスを図3に示した。

No.10は，本名に対するネガティブな経験や感情がなく，本名を名のることによって周囲から興味を持ってもらえるといったポジティブな経験や，本名を名のる方が隠すことがなくて楽だといったポジティブな感情から，今後本名だけを使用して生活していこうという＜意識＞を持っていた。しかし，重要他者は通名使用を促すような意識を持っており，自分の本名を名のろうとする＜意識＞と通名を支持する＜重要他者の意識＞がぶつかることによって葛藤が生じていると考えられた。No.10の場合，ネガティブな経験や感情については語られず，自身の感情における葛藤ではなく，自分の＜意識＞と＜重要他者の意識＞との間の葛藤が見られた。しかし，No.10はそうした葛藤を経て，周囲の人の意識を変えたいという目標を持って本名を名のるという＜行動＞を選択していた。

(3) 名のり行動において葛藤を示さなかった例

No.9の名のり行動のプロセスを図4に示した。No.9は自分が本名を名のることで，在日であることを公表していない人が自分に打ち明けてくれたり，興味を持ってもらえるなどのポジティブな経験をしており，ネガティブな経験についての発言は見られなかった。ポジティブな経験からは「名前を覚えてもらえることがうれしい」といったポジティブな感情が生じていた。No.9はネガティブな経験がなく，ネガティブな感情も生じていないのであれば，葛藤をせずに現在の名のり行動を形成している可能性が考えられた。しかし，【本名を名乗りづらくする母国のイメージについての自分のイメージ】では，ネガティブなイメージを持っていることが語られていた。こうしたイメージを持っていても，「自分が（本名を）隠す必要もない」というような＜意識＞を持っており，この＜意識＞は家族，特に父親の民族意識が高く，家族で話をする機会もあり，No.9自身も「家族の影響が一番大きい」と語っているように，少なからず影響を受けていると考えられた。また，テレビでの母国に対する報道に対し，感情的になることがあったが，朝鮮学校で学ぶうちに冷静に考えられるようになったと語っており，「隠す必要もない」といった【今後の名前の使い方】の＜意識＞にも影響していた。

No.9の場合，重要他者の影響が大きいと考えられ，ネガティブなイメージはあっても堂々と本名を名のることができ，また名のりに関してポジティブな経験や感情を持っているため葛藤を感じておらず，名前の漢字を書くのが面倒で通名を使うという状況以外では全て本名で生活していた。そして，自分が本名を名のることによって周囲に在日について知ってほしいという思いから，本名を積極的に使用していると考えられた。

4. 本研究の限界と今後の課題について

本研究では高校を卒業し，進学や就職に直面する時期の在日コリアン青年を対象にインタビュー調査を行うことを目的として対象者を選定したが，筆頭著者の友人・知人とその紹介で協力を得たため，朝鮮学校出身者がほとんどで，対象者の属性に偏りが生じた。今後の課題としては，対象者の経歴に偏りが無いよう選定することが必要であると考えられた。また，在日コリアンの中には全く民族に触れることなく生活している人も存在するため，そうした人にもインタビュー調査を行うことができれば，語りの内容のバリエーションがより豊富になる可能性がある。しかし，在日コリアンに関する研究は社会学的な研究が多く，心理学的な研究が希薄な中で，11名の在日コリアン青年にインタビューを行い，名のり行動を形成するプロセスやそこでの心理的葛藤の関連を明らかにすることができ，それによってアイデンティティが揺らぎやすい在日コリアン青年の今後の生き方を考える1つの道標を築くことができたことに本論文の意義があると考えている。

謝辞

本研究の調査に協力してくださった調査対象者の皆様に，心より御礼申し上げます。

文献

福岡安則・辻山ゆき子(1989). 同化と異化のはざまで(1) ―在日韓国・朝鮮人三世のアイデンティティ―. 千葉県立衛星短期大学紀要, 7 (2), 69-80.

原　千亜(2011). 在日ミャンマー人のアイデンティティから見る言語の社会化の事例. 桜美林言語教育論叢,7,133-146.

金原左門・石田玲子・小沢有作・梶村秀樹・田中　宏・三橋　修(1986). 日本のなかの韓国・朝鮮人・中国人―神奈川県内在住外国人実態調査より―. 明石書店

木下康仁(2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践－質的研究への誘い. 弘文堂

木下康仁(2007). ライブ講義M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて. 弘文堂

中村俊哉(2001). 香港における英語名と中国名の使い分けと香港人アイデンティティ. 福岡教育大学紀要, 50 (4), 207-217.

朴　育美(2008). 名前とアイデンティティ（上）. ヒューマンライツ,239,7-13.

李　和子・田渕五十生(2005).「奈良・在日外国人保護者の会」の活動とその意義―民族的アイデンティティの育成に焦点を合わせて―. 奈良教育大学,54(1), 127-140.

佐竹眞明(2011). 在日外国人と多文化共生：地域コミュニティの視点から. 明石書店

重松由美(2011). 在日ブラジル人のエスニック・アイデンティティ―ブラジル人学校の保護者への「教育に関するアンケート調査」の結果に基づいて. 明石書店

申　鉉夏・権藤与志夫(1982). 在日韓国人子弟のナショナル・アイデンティティに関する調査研究. 九州大学比較教育文化研究施設紀要,33,55-76.

宣　憲洋(2001). 在日韓国・朝鮮人の本名使用を促す一方策. 小樽商科大学言語センター広報,9,63-66.

平　直樹・川本ひとみ・慎栄根・中村俊哉（1995). 在日朝鮮人青年にみる民族的アイデンティティの状況によるシフトについて. 教育心理学研究, 43(4), 380-391.

竹尾和子・矢吹理恵(2006). 在日外国人の名のり行動における関連要因の検討－エスニック・アイデンティティ. 発達研究, 20,67-80.

矢吹理恵(2005). 国際結婚の日本人妻の名のりの選択に見られる文化的アイデンティティの構築：戦略としての位置取り 発達心理学研究, 16 (3), 215-224.

梁　陽日(2010). 在日韓国朝鮮人のアイデンティティと多文化共生の教育―民族学級卒業生のナラティブ分析から―. コア・エシックス,6,473-483